高齢者女性のライフコースにおける就労と地域集団参加

愛知学院大学　鈴木佳代

1　目的

地域集団参加数が多いことは、後期高齢者女性にとってディストレスの低さ、生活満足度の高さと関連している（原田ら　2005）。JAGES（日本老年学的評価研究）プロジェクトの 2010-2011 年度調査データを用いた量的分析では、高齢者女性の地域集団参加の寄与要因のひとつとして、就労経験が示された（Suzuki, 2014 年度世界社会学会議報告）。しかしこの分析では、就労経験がいかにして地域集団参加につながるかの経路までは明らかにすることができなかった。そこで本研究では、高齢者へのライフヒストリー・インタビューで語られた地域集団参加について、それ以前のライフコースにおける就労経験と関連付けて分析し、その経路を明らかにすることを試みた。

2　方法

半構造化面接により、12 名の女性（65～82 歳）に 2 回ずつライフヒストリーの聞き取りを行った。1 回目の面接ではライフヒストリーの概要を聞き取り、2 回目には主要なライフイベントや健康・家庭・職業・社会的サポート上の変化について掘り下げを行った。インタビュー時間は 1 回あたり 42 分から 153 分（平均 95 分）だった。インタビュー内容は文字化してコーディングし、事例-コード・マトリックスを作成して分析した。

3　結果

インタビューした 12 名の高齢女性（全員婚姻歴・子どもあり）のうち、学卒から 65 歳までの時期の 3 分の 2 以上を専業主婦として過ごしたのは 4 名で、全員が結婚退職（家業からの退職を含む）していた。4 名中 3 名はインタビュー時、地域集団とのつながりが希薄な状態にあり、その原因と考えられるエピソードには、本人の健康状態、家族の介護、サポートしてくれる家族の存在などがあった。これに対し、学卒後の大半が就労状態にあった 8 名のうち、1 名は高齢期の転居により地域とのつながりを失っており、3 名の地域組織参加は地縁によるものが中心で、4 名は職場でのつながりや経験が現在の地域集団参加に影響していることを示唆するエピソードを持っていた。これらは具体的には、仕事の経験を通じて社交的・積極的になる、昔の同僚と偶然再会して体操の会や高齢者の集まりに誘われる、保育士資格を持つ女性が託児ボランティアの会に入る、茶華道資格を持ち花屋に勤務していた女性が趣味の生け花クラブを立ち上げる等であった。またインタビューの中では、近隣と濃密な関係を持つことに対する抵抗感や、義務感のみで町内会に参加している等、地域集団参加の負の側面を浮かび上がらせる発言もあった。

4　結論

青年期・壮年期の就労が高齢者女性の地域組織参加につながる経路として、就労による（1）社交性の獲得、（2）人間関係の構築、（3）専門性の活用が見出された。また、専業主婦は地域とのつながりが希薄な女性が多い傾向があったが、背景には健康上の課題や家族介護、家族との濃密な支援関係等のあることが示唆され、地域組織参加との交絡要因となっていると考えられた。

【文献】　原田謙・杉澤秀博・浅川達人・斎藤民「大都市部における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康」『社会学評論』55(4): 434-448.

【謝辞】本研究は、科学研究費補助金若手研究 B「健康の社会的決定要因をめぐる質的ライフコース研究」（課題番号 24730487）の一環として行われた。